



寺報

2020年(令和2年)

No. 295

6月号

Zenkyo-ji monthly
Communications Paper
En [えん]



七高僧シリーズ その6

第六祖 源信和尚(僧都)(げんしんかしょう)(そうず)

942年～1017年(日本は平安時代、『源氏物語』が書かれた頃)

著作:『往生要集』(おうじょうようしゅう)

特色:淨土に「真実の報土」と「方便の化土」のあることをあきらかにし、

「真実の報土」を願う者は、本願の名号を信受することをすすめた。(報化弁立)

略伝

平安時代の中ごろ、奈良県の二上山の心もとの当麻に生まれ、幼名を千菊丸といいました。千菊丸は7才の時、父と死別します。9才の頃、近くの小川で鉢を洗う僧を見て次のような問答をしたといいます。

「お坊さま、向こうの川の方がきれいですよ」

「すべてのものは、淨穢不二じや。きれい、きたないは凡夫の心の迷いじや。このままでよい、よい」

「それじゃ、どうして鉢を洗うの?」

「……」

数日後、比叡山から使いが来て、利発な千菊丸の出家の話が決まりました。問答をした旅の僧の勧めによるものでした。

千菊丸は比叡山に登り、良源僧正の門下に入り、13才の時に髪をおろして得度し、源信の名を与えられました。

源信の才知はまわりの者の目を見張らせました。15才にして時の村上天皇の前で特別に『称讚淨土經』を講じる名誉を得ました。天皇をはじめ感嘆しない者はなく、数々のほうびの品と「僧都」の位が授けられました。

源信は早速この喜びを当麻に一人で暮らす母に知らせようと思い、使いの者にほうびの品を持たせます。しかし、ほうびの品は返されてきて、和歌が添えられていました。

「後の世を渡す橋とぞ思ひしに 世渡る僧となるぞ悲しき まことの求道者となり給へ」

母の厳しい訓戒にうたれた源信は精進を重ね、比叡山の横川の恵心院に住んで

念佛三昧の日を送りました。三十数年後、母は念佛を勧める源信の膝を枕に安らかな往生をとげたといいます。

源信は、「私のような頑魯(がんろ)ニ愚か(ぐか)」の者が救われていく道は、阿弥陀如来のみ教えしかないと『往生要集』の序文に記し、安養(淨土)に生まれて悟りを開く淨土門の教えに自ら一筋に帰順し、淨土の教えに帰入することをすすめました。

源信は『往生要集』を著した翌年、「二十五三昧式」という念佛実践の文をつくり、毎月15日に首楞嚴院において25人の結衆が参集して念佛三昧を修めました。「二十五三昧式」には、看病や葬送のことについて書いてあり、現代における老後の念佛生活の指針になり得る内容を持っています。結衆に病人が出た場合、見舞い看病し念佛を勧めた源信らの活動は、現代のビハーラ活動の先駆ともいえるものです。

源信は、主著『往生要集』をわずか六ヶ月で書き上げたといいます。『往生要集』は源信44才の時の著作です。

これは、ダンテの『神曲』にも比すべき、わが国有数の宗教文学作品で、引用文献の多さでは、七祖の書物の中で第一の書物です。

源信は、『往生要集』で全仏教を踏まえて念佛を明らかにしたのです。



源信和尚(僧都)



親鸞聖人像の横に花を咲かせるシジ(躊躇)

おりますね。

参式も中止としました。六月の安居会法要も恐らく取り止めになるでしょうか。七月末の夏の子ども会も、この様子だと難しいかもしれません。お盆の法要から、なんとか縮小してでもお勤めでありますね。

寂しい話題ばかりで申し訳ありません。
ステイホームで、大切な人とも会えなくなり、人と会える事は

参式も中止としました。六月の安居会法要も恐らく取り止めになります。家族だけに縮小して勤まる感じになりました。葬式は、ここ数年、家族葬に移行しておりましたが、最近では近親者葬であります。二名から五名くらいの少人数での葬儀も増えました。ご縁のあつた多くの方々に見送つて頂きたかったのに、寂しい限りです。

本堂での法要は、四月の永代経法要は取り止め。五月末の初

度目の緊急事態宣言が出てしまいました。再度、ステイホームだ、自肃だと言われると、正直、心が折れそうな感じ……。

住職レター

広島県で緊急事態宣言が解除されました。しかし今後も、マスク着用、ソーシャルディスタンスを守る生活には変化がない様子。新型コロナウイルス感染症のワクチンや治療薬が開発されないと、この不便な生活は変わらないのでしょうか。コロナと上手く付き合い、